

北斎「百人一首うばがえとき」の画想と『百人一首図絵』

岩切 友里子 (立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員)

要旨

北斎の錦絵シリーズ「百人一首うばがえとき」は、出版された作品は27図が確認されるのみであるが、その他に残された版下絵などで全91図の図様を知ることができる。完成していれば、北斎の最大の錦絵シリーズとなったものであるが、しばしば、歌と絵の関係に難解なものとされている。本稿では、北斎「百人一首うばがえとき」と絵本『百人一首図絵』の関連を示す例を挙げ、北斎の一部の画想が該書に導かれた可能性を述べ、図様の解釈の一助としたい。

abstract

Of the series of *Hyakunin isshu uba ga etoki* (*One Hundred Poems by One Hundred Poets, Explained by the Nurse*) by Hokusai, only twenty-seven are known. However, we can see all of the ninety-one designs through the finished preparatory drawings (*hanshita-e*), reproductions of original drawings and one keyblock print.

In this paper I would like to point out the possibility that some of Hokusai's images of this series are derived from the illustrations of the picture book '*Hyakunin isshu zue*' (*Illustrated Hundred Poems by One Hundred poets*) with some examples demonstrating the relationships between the two works.

北斎の天保期の錦絵シリーズ「百人一首うばがえとき」¹⁾は、出版された錦絵、版下絵などで全91図の図様を知ることができる²⁾、彼の並々ならぬ制作意欲が示されている。出版の中断については、版元側の経営上の問題のほか、歌と絵の関係に難解なものがあったことも一因であったのではないかということがこれまでの諸氏の論考で一致した見解として提示されている³⁾。

本シリーズの北斎の絵画化の方法について考察するためには、錦絵ばかりではなく、版下絵も含めての検討が不可欠であり、1989年のピーター・モース著『北斎 百人一首』⁴⁾では、各図について詳細な検討がなされている。本稿では、これまで触れられていなかった絵本『百人一首図絵』⁵⁾の図と北斎「百人一首うばがえとき」の関連を示すいくつかの例を提示し、北斎が該書に画想を導かれた可能性を指摘したい。

(※北斎の版下絵及びジロッタージュはFreer Gallery of Artのサイトで、『百人一首図絵』は跡見学園女子大学図書館・百人一首コレクション

画像データベース、早稲田大学図書館・古典籍総合データベース(書名は『百人一首図絵』)で画像公開されているので、適宜、参照して頂きたい。)

1 『百人一首図絵』について

『百人一首図絵』(以後、『図絵』と略記する)は百人一首を注釈した絵本で、文化4年(1807)刊、田山敬儀著、正三位刑部卿貞道序、灰方文林舎藏板(跡見学園女子大学図書館本、早稲田大学図書館本は版元に「中川藤四郎」が加わっている)。著者の田山敬儀(1766-1814)は伊勢津藩士、京で小沢蘆庵に歌学を学んだという。本書は、月花雪の3冊で構成され、「月」には歌仙図と歌に「古説系図」、「雪」と「花」の2冊には、見開きに各歌の注釈と図がある。文政5年(1822)に江戸書林須原屋茂兵衛、浪花書林多田勘兵衛など六書肆によって(ARC古典籍ポータルデー

データベース・Ebi0952)、文政7年(1824)には、須原屋茂兵衛、大坂秋田屋太右衛門の2書肆によって(ARC古典籍ポータルデータベース・MM0092)再版されていることから、本書が広く享受されていたことが窺える。

絵師名は奥付には記されておらず、漆山又四郎著『日本木版挿絵本年代順目録』⁶⁾に「岡田玉山歟」とあるのを見るが、国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベースでも絵師の情報は見られない。しかしながら、架蔵本の花の巻26丁「貞信公」の図右下には、他の諸本には見えない「田宮禎」という印形が刻されている(図1)。田宮禎は文化3年(1806)刊『嗚呼矣草』^{おこたりぐさ}の奥付に、



図1
『百人一首図絵』
貞信公(個人蔵)
部分拡大

「東牖子田宮悠述」と並んで「男禎画」とある人物と見られる。東牖子田宮悠は、仲宣、橘庵とも号した上方の文筆家で、禎はその息子ということになる。文化2年刊『絵本徳行譚』の奥付には「田東牖校補・男太一郎画」とあり、太一郎が「禎」と号したものであろうか。田宮

禎に関してはこれ以上の情報を持たないが、花・雪の全百図には、公家や官女などの情景図ばかりではなく、俯瞰的景観図、風俗図、故事の絵など、緻密な描写の多様な画が含まれており、その画風は岡田玉山、竹原春泉齋に通じるものがある。

描かれている図は、歌意をそのままに表わしたのもあるが、当世の風俗として描かれた図も多い。また、歌意とは直接的には結び付かず、後述するように、歌番号46首祢好忠には王昭君を描くなど、見立の手法をとっている場合もある。画中の田山の注釈は専ら歌に関するものだけで、描かれている図に対する説明は一切ない。

こうした絵画化の方法は、著者の田山の指示ではなく、絵師の自由な発想になったものだったようである。花の巻にある田山の付言には次のようにあり(一部、仮名を漢字に変換し、句読点を付

した)、この付言からも、その経緯が窺える。

つけていふ

この図絵にうつせる、山川、鳥、獸、草木など、歌にあはせてゑかかせつれと、絵やうのおなしさまになると、恋の歌などの図にあらはしがたきを、かく人のわふれは、よしや、たゝいささかもよるところあらば、いかさまにもかきなせ。わかときことは歌によりて絵によろしとゆるしたるもあれハ、見む人さるころしたまへ。ときことにふるきかなを用るハ、わかつかひなれたればなり。

百人一首を当世化して絵画化したものとしては、元禄8年(1695)の菱川師宣『姿絵百人一首』、寛延2年(1749)の西川祐信『絵本小倉山』、元文5年(1740)の奥村政信『絵本小倉錦』などがあり、宝暦7年(1757)の北尾辰宣『絵本百人一首』では、故事の絵なども含んでかなり自由な発想の絵画化が見られる。錦絵では、鈴木春信の作など、歌意の当世化作品として重要なものであろう。

『百人一首図絵』の図は、こうした流れの上に位置付けられようが、名所図会風の景観描写もあり、町人ばかりでなく農民、獵師、職人といった当世の人々のさまざまな生業の描写などを含む点で、百人一首の絵画化に新しい視点を見せている。ことに諸種の生業を描く特徴は、北斎の「百人一首うばがえとき」に通ずるものでもあり、北斎の画想に少なからず影響を与えたのではなからうか。

図2は、歌番号82道因法師「思ひ詫びさても命はあるものを うきにたへぬは涙なりけり」で、獵師を描く例である。歌は『千載集』恋三から採られたものであるが、図は法師が、鉄砲を肩にした獵師や仕留めたばかりの鹿を運ぶ獵師達とすれ違う情景である。まるで、鹿の命に涙したかのよう歌意を解釈したかともとれる図様で、元来の歌意とは離れた特殊な絵画化が行われている。このような手法も、北斎の画想に影響を与えた可能性がある。以下、北斎の画想を導いたと思われる『百人一首図絵』のいくつかの例を挙げる。

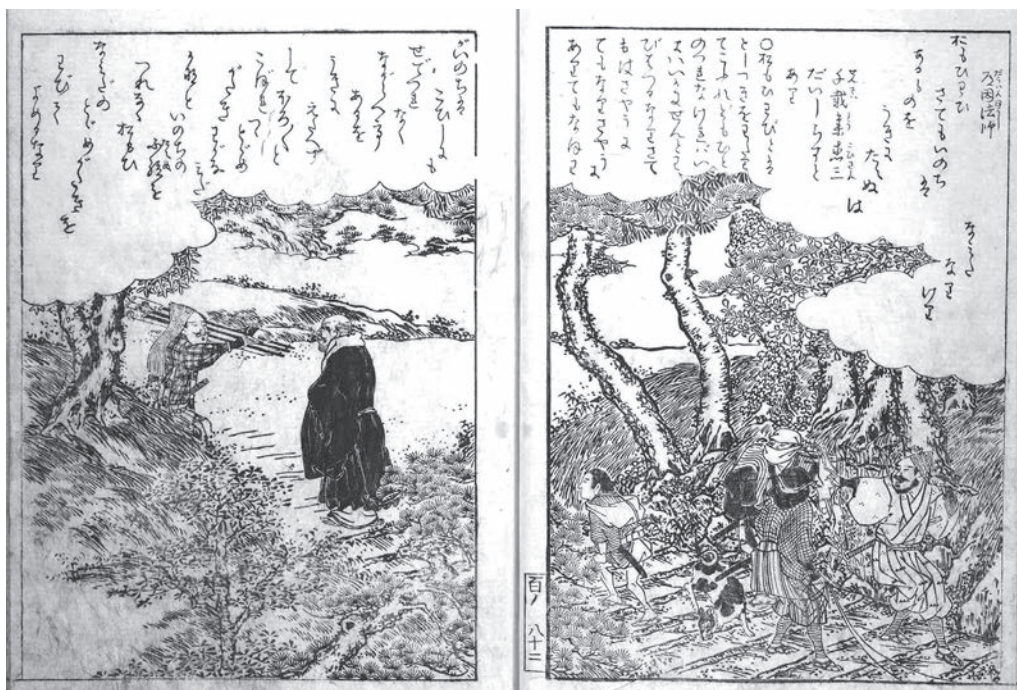


図2 『百人一首図絵』 道因法師
(立命館ARC/古典籍閲覧ポータルデータベース・Ebiコレクション・Ebi0952『百人一首図会』、以下番号のみを掲出)

2 『百人一首図絵』と「百人一首うばがえとき」の比較

(1) 歌番号65 相模

「恨みわびほさぬ袖だにある物を 恋にくちなむ名こそ惜しけれ」

本図については、モース著『北斎 百人一首』において、背景に描かれる「錦木塚」が重要なヒントを与えているというロジャー・キーズ氏の指摘が紹介されている。この「錦木塚」は『図絵』の図にも描かれている。

「錦木塚」は、東国の歌枕の名所として知られ、世阿弥の謡曲「錦木」にも扱われている。享保17年(1732)刊の橘守国『謡曲画誌』巻八「錦木」では、『後拾遺集』巻十一「恋一」の能因法師「錦木は立ながらこそ朽にけれ けふの細布むねあはじとや」の歌を引き、陸奥には男が柴を束ねた錦木を恋する女の門口に立て、女は心に叶えば錦木を取り入れ、否む時はそのまま門口に打ち捨てておくという風習があり、狭布の里で三年の間女

の元に通った男がいたが、錦木は千束になっても恋は叶わず、男はついに空しくなり、人々がこの錦木を埋めた塚を錦木塚と呼んだとされている。この話は宝暦12年(1762)刊、鳥飼醉雅著・月岡丹下(雪鼎)画『東国名勝志』巻一「錦塚」にも見えている。

『図絵』の田山の注釈は錦木塚について全く触れていないが、相模の歌の叶わぬ恋の悲しみを表わす「恋にくちなむ名」と、門口で朽ちていく錦木のイメージが結び付けられたものであろう。情景は、家の中で布を織る女が描かれてはいるものの、はね釣瓶で水を汲む女が旅人に錦木塚を教えるような素振で、その手前では里の女たちが糸を伸ばすような作業をしており、子どもを連れた老婆は束ねた糸を肩にしているという、当世の農村の情景である。

北斎の版下絵は、布を干す女、できあがった布を買い付けに来たと思われる商人たちを描き、『図絵』と同じように松が植えられている錦木塚を背景に置く。これは、相模の歌意を「錦木塚」で表すのみで、当世の農村の情景を描くという『図絵』と構想を一にするものである。

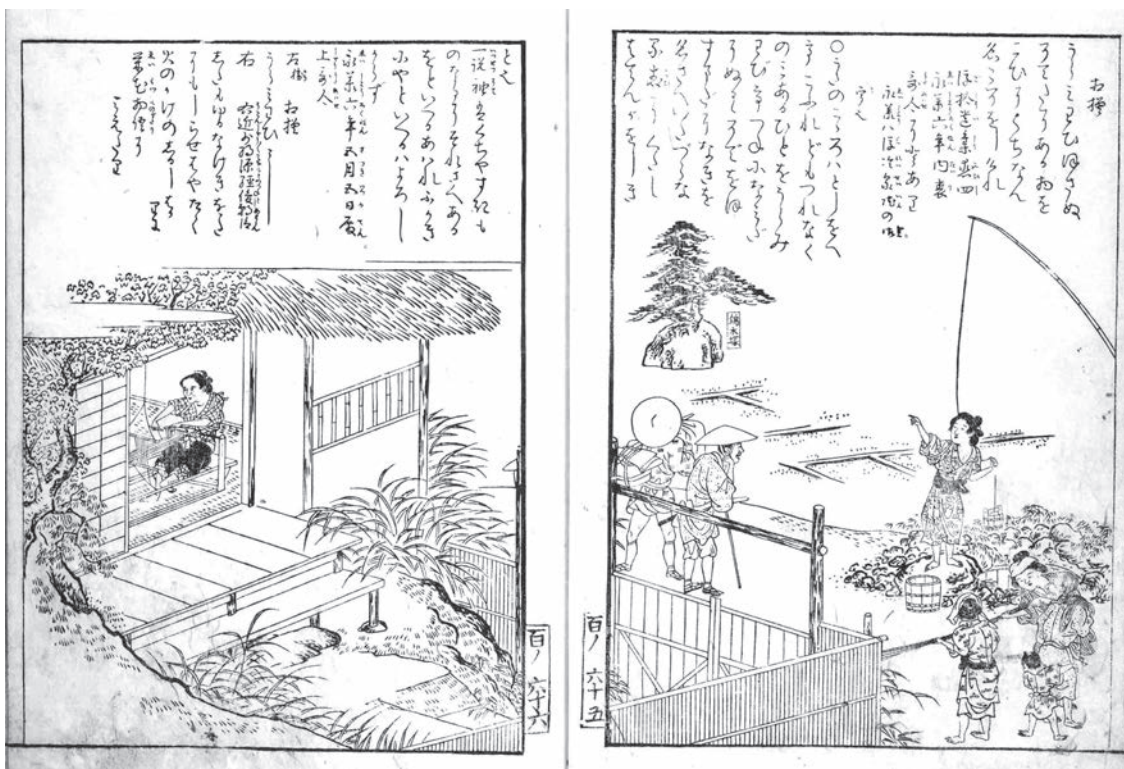


図3 『百人一首図絵』 相模 (Ebi0952)

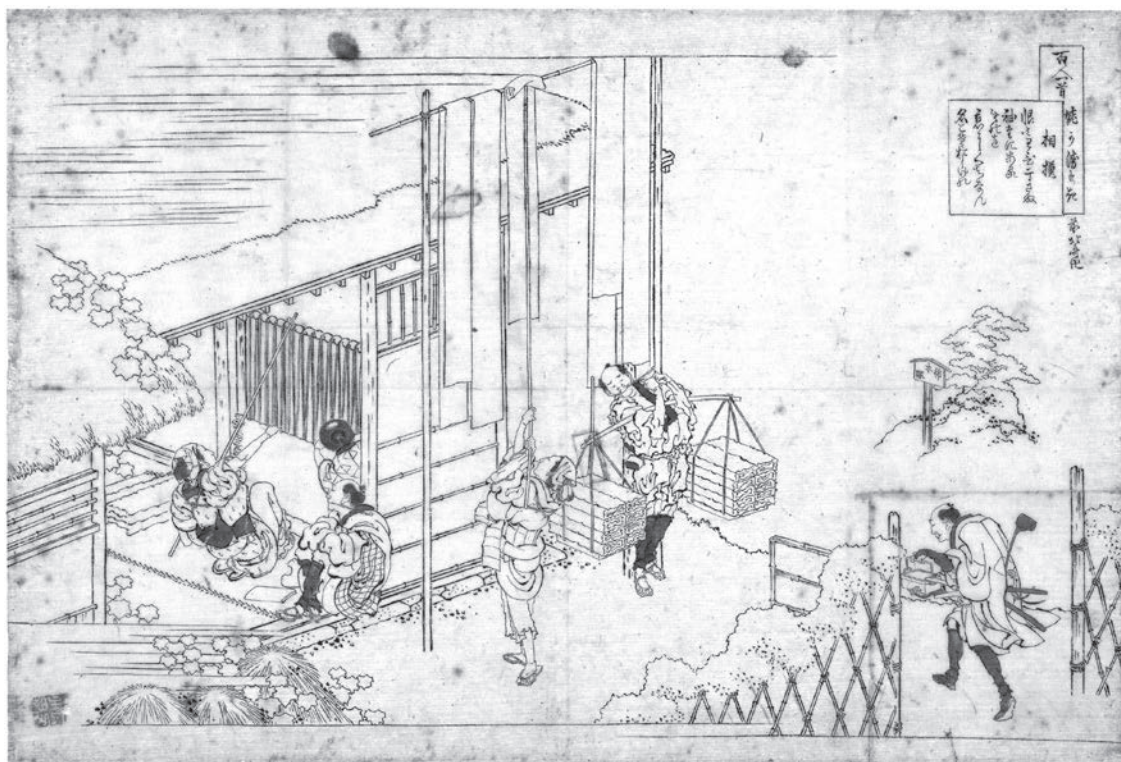


図4 百人一首うばがえとき 相模 (Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F 1907.564)

(2) 歌番号4 山部赤人

「田子の浦にうち出てみれば白妙の 富士のたかねに雪は降りつつ」

この歌を題材とした作では、歌川国芳「百人一首之内・山辺赤人」に見るように、田子の浦の浜に出て富士を仰ぐ赤人の姿が一般的で、当世化した作例でも礪川亭永理「百人一首見立八景・山辺赤人 富士の暮雪」(たばこと塩の博物館蔵)のように浜に出た旅人が描かれる。これに対し、『図絵』は浜辺を描かず、画面の右側の近景に峻しい崖道を配し、開けた景色との対比を効果的に表わしている。崖道には旅人たちの姿も小さく描かれており、途中で腰を下ろして富士の姿を眺める人たちもいる。北斎の絵とは富士の位置こそ異なるが、近景に崖道を配した特殊性、構図の類似は明らかであろう。(図5・図6)

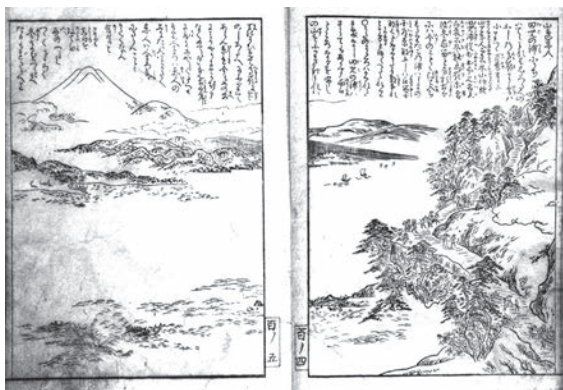


図5 『百人一首図絵』 山辺赤人(個人蔵)



図6 百人一首うばがえとき 山辺の赤人(The British Museum, 1906.1220.0.583)

(3) 歌番号5 猿丸太夫

「奥山にもみじふみわけなく鹿の 声聞くとときぞ秋はかなしき」

『図絵』には山奥で木を挽く職人たちが描かれる。このモチーフは、同じく紅葉の情景を歌った、歌番号32春道列樹「山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり」で北斎が描いた図を思い起こさせる⁷⁾。(図7・図8・図9)



図7 『百人一首図絵』 猿丸太夫(個人蔵)



図8 図7の部分拡大



図9 百人一首うばがえとき 春道列樹(The British Museum, 1922.0719.0.4)

(4) 歌番号37 文屋朝康

「白露に風の吹きし秋の野は つらぬきとめぬ玉
ぞ散りける」

歌には「秋の野」とあり、風に飛ばされる白露としては一般的に草葉の露のイメージが浮かぶが、『図絵』では手水をつかう尼僧が描かれ、池の蓮の葉の上に飛ぶ露が描かれている。北斎の絵の蓮の葉の露という特殊な要素を導いたのではなからうか。(図10・図11・図12)

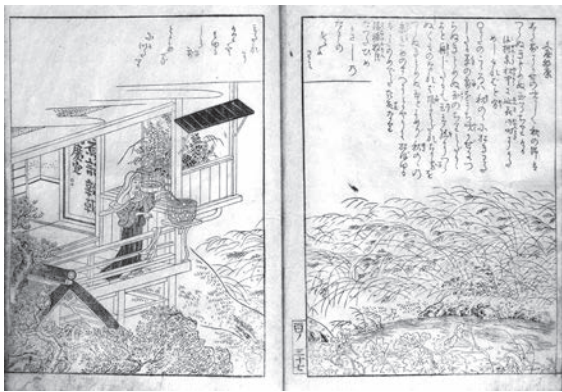


図10 『百人一首図絵』 文屋朝康(個人蔵)



図11 図10の部分拡大



図12 百人一首うばがえとき 文屋朝康(The British Museum, 1920,0514.0.1)

(5) 歌番号17 在原業平朝臣

「ちはやぶる神代もきかず龍田川 からくれなるに
水くるとは」

『図絵』は、紅葉の下で酒を飲んで楽しむ人々、草刈を終えて山道を帰る親子を描く。これらは、北斎の絵の紅葉狩の酒に酔って帰る人、作業を終えて帰る農夫というモチーフに類似する。(図13・図14)

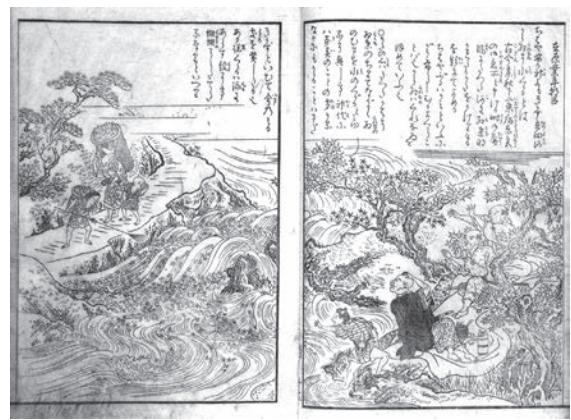


図13 『百人一首図絵』 在原業平朝臣(個人蔵)



図14 百人一首うばがえとき 在原業平(The British Museum, 1906,1220,0.577)

(6) 歌番号18 藤原敏行朝臣

「住の江の岸による波よるさへや 夢の通ひ路人
めよくらむ」

背景には住吉の浜と住吉の社が描かれる。「通ひ路」から海を渡る船のイメージを想起することは自然な流れではあろうが、北斎の絵は、『図絵』の右下の近景に描かれる帆船をクローズ・アップした構図となっている。(図15・図16・図17)

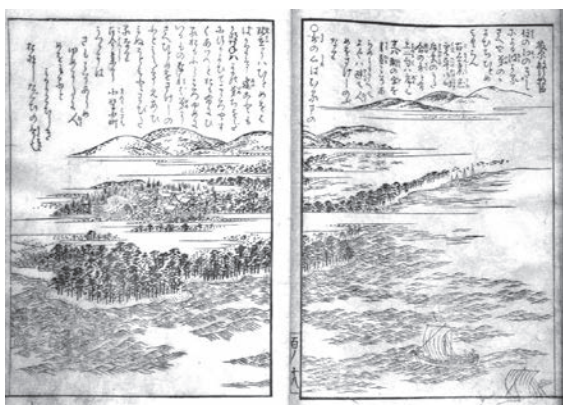


図15 「百人一首図絵」 藤原敏行朝臣(個人蔵)



図16 図15の部分拡大

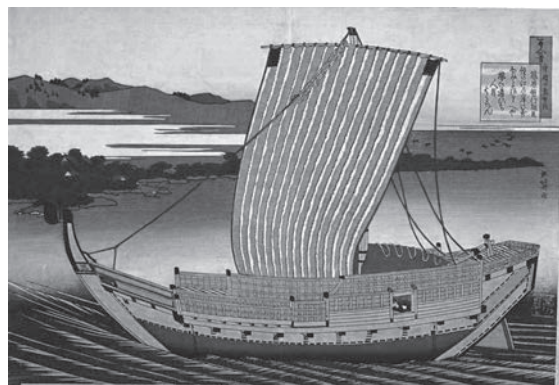


図17 百人一首うばがえとき 藤原繁行朝臣(国立国会図書館)

(7) 歌番号34 藤原興風

「誰をかも知る人にせむ高砂の 松も昔の友なら
なくに」

浜辺のみごとな松の下で、床几に腰かけて憩う人々という当世の情景の設定が共通する。(図18・図19)

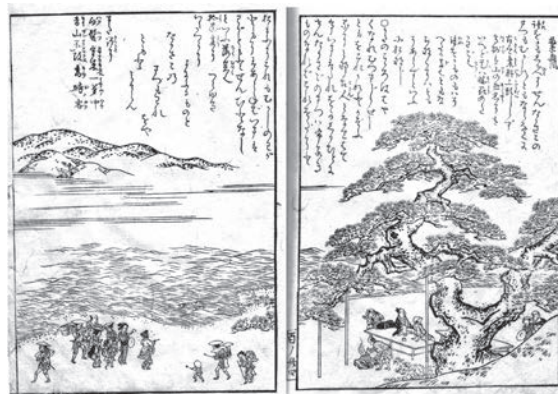


図18 「百人一首図絵」 藤原興風(個人蔵)



図19 百人一首うばがえとき 藤原興風 (Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Purchase — Charles Lang Freer Endowment, F1968.64)

(8) 歌番号39 参議等

「浅茅生の小野の篠原忍ぶれど あまりてなどか
人の恋しき」

篠原の小道を従者を連れて行く公家の姿が共通している。(図20・図21)



図20 『百人一首図絵』 参議等(個人蔵)



図21 百人一首うばがえとき 参儀等(The British Museum. 1921,0614.0.18)

(9) 歌番号86 西行法師

「嘆けとて月やは物を思はする かこちがほなる我
が涙かな」

草庵に座して月を見上げる西行法師。右下に門扉を配する構図も同じである。(図22・図23)

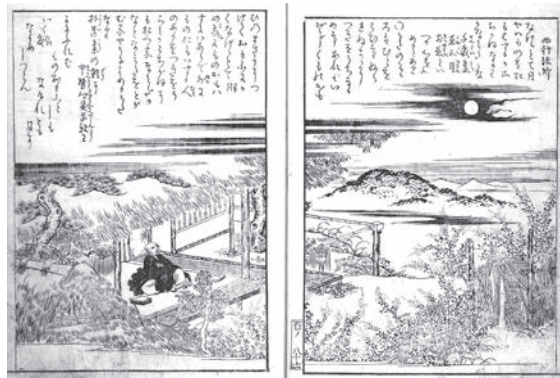


図22 『百人一首図絵』 西行法師(Ebi0952)

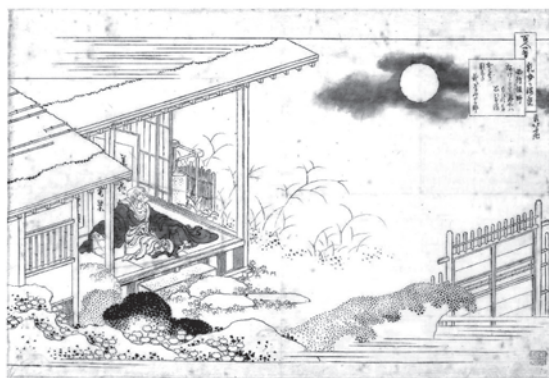


図23 百人一首うばがえとき 西行法師(Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F1907.573)

(10) 歌番号87 寂蓮法師

「村雨の露もまだひぬまきの葉に 霧立ちのぼる
秋の夕暮れ」

『図絵』のテキストには「このうたは深山の秋夕のけしきいもめのまへにみるやうによめり」とあり、図には深山の山道を行く旅人たちが荷を置いて笠や草鞋の紐を締め直している姿が描かれている。北斎の絵では環境の描写がないが、『図絵』の人物のモチーフだけを抽出したような画想となっている。(図24・図25・図26)

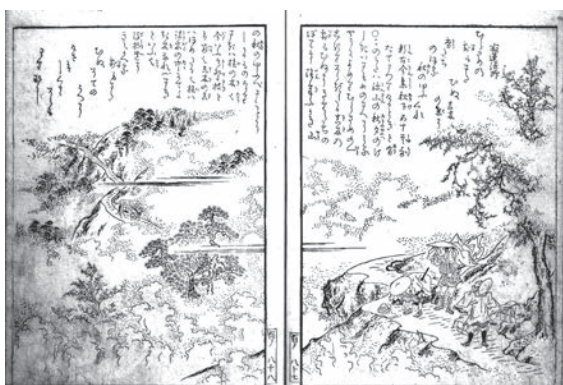


図24 『百人一首図絵』 寂蓮法師 (Ebi0952)



図25 図23の部分拡大



図26 百人一首うばがえとき 寂蓮法師 (Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F 1907.574)

(11) 歌番号91 後京極摂政前太政大臣

「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣かたしきひとりかもねむ」

楼上の床からひとり外の景色を見やる女性。形は違うが行燈が配される設定も似ている。(図27・図28)

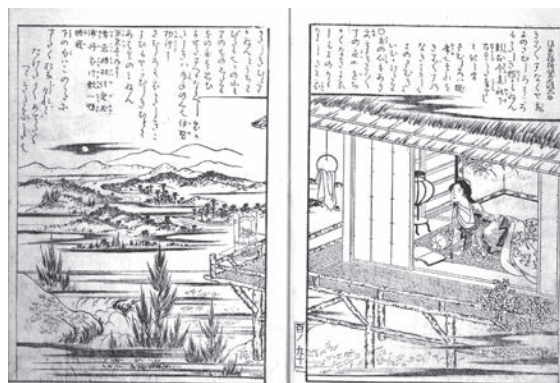


図27 『百人一首図絵』 後京極摂政前太政大臣 (Ebi0952)

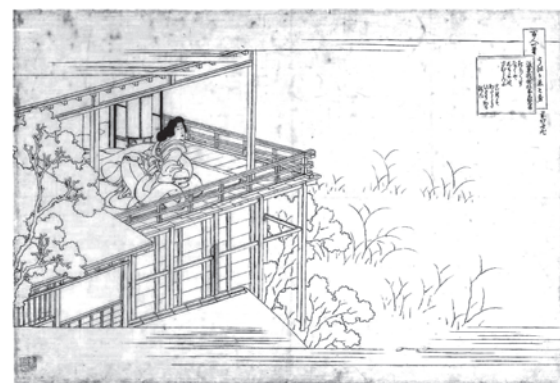


図28 百人一首うばがえとき 後京極摂政前太政大臣 (Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F1903.288)

3 『百人一首図絵』における見立の手法

歌番号46 曾根好忠

「由良の戸を渡る舟人かぢを絶え ゆくへも知らぬ恋の道かな」

本図には、異郷の匈奴に送られる前漢の元帝の宮女、王昭君が描かれる。「ゆくへも知らぬ恋の道かな」によって導かれたものと見られるが、テキストには王昭君については何も書かれていない。琵琶を抱いて馬に乗り、送られていく王昭君の姿が画題として広く認識されていたことを示す。ここでは、故事物語絵が歌意に見立てられている点に注目したい。なお、北斎の「うばがえとき」の曾

根好忠の図は確認されていない。

『図絵』では、このほかに、43中納言敦忠では「班女」、44中納言朝忠では「反魂香」、45謙徳公では「仏御前」が描かれている。いずれも、図の説明はなく図様だけで物語のわかる画題であったからであろう。画題知識の重要性を示す一例でもある。

一方、「うばがえとき」では、43中納言敦忠では「葛の葉」、44中納言朝忠では「丑の刻参り」が描かれる。同じ歌番号の絵が、当世風俗や直接的な歌の情景ではなく、『図絵』と同じように物語の絵として表わされているのは偶然であろうか。『図絵』の物語絵による見立という手法に北斎の画想が誘導された可能性がある。



図29 『百人一首図絵』 曾根好忠(個人蔵)



百ノ四十六

歌番号45 謙徳公

「あはれともいふべき人は思ほえて 身のいたづら
になりぬべきかな」

「うばがえとき」では、大きな糸紡ぎ車を回す当
世風俗の女たちと室内で機を織る若い女が描か
れているが、現実的な情景描写とはみなしがたい。
車には「三界唯一心 心外無別法」という『華嚴
経』の語が記されており、背景には蓮池が描か
れているところから、仏教に関する説話が想起さ

れる。菴に置かれた籠の中にあるのは、綿ではな
く、植物の茎のような形をしている。こうしたモチー
フから思い浮かぶのは、蓮の茎の糸で曼荼羅を
織り上げ、まもなく西方浄土へ旅立ったという中将
姫の伝説である。

北斎がここでも、物語絵による見立の手法をとっ
たと考えれば、本図は中将姫の伝説を当世化し
た描写と見ることができるのではなかろうか。(図
30・図31)

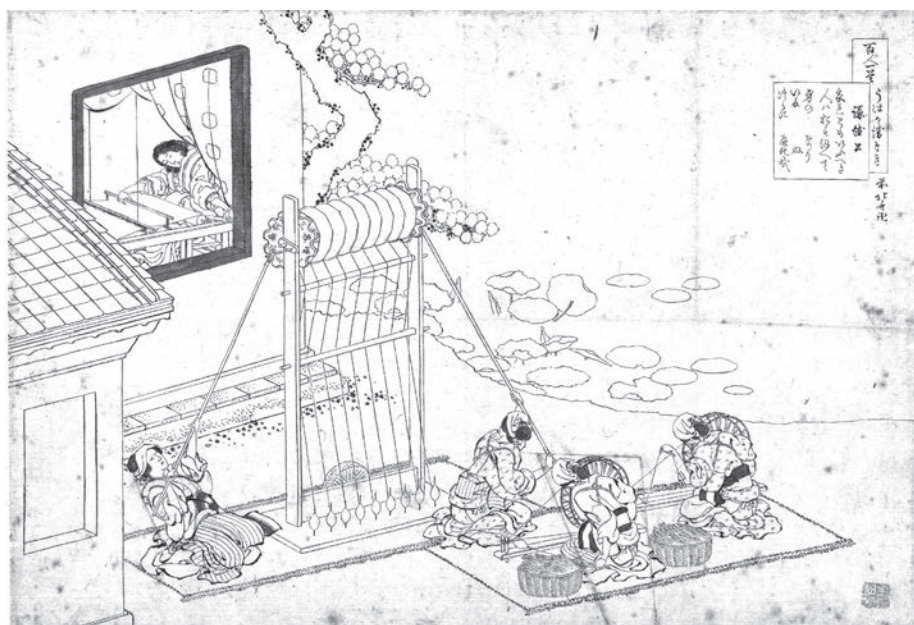


図30 百人一首うばがえとき 謙徳公 (Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F1907.557)

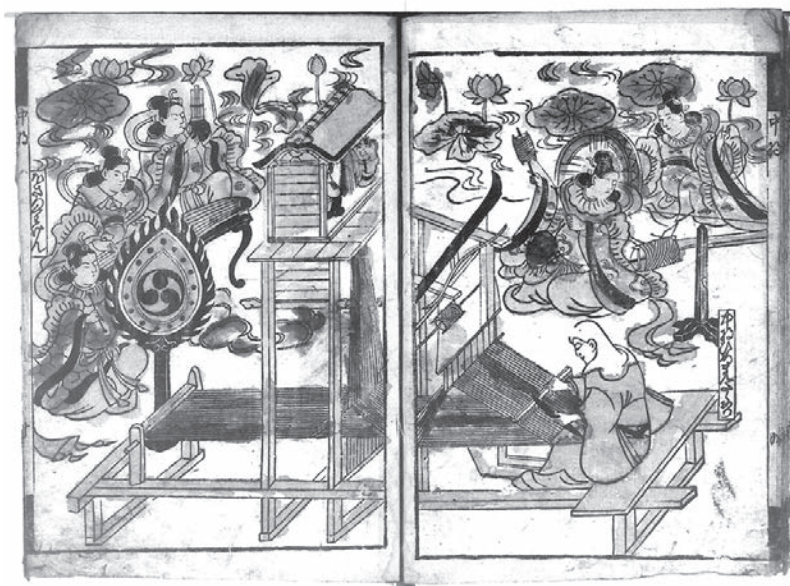


図31 古浄瑠璃『中将姫御本地』(大阪大学附属図書館赤木文庫)

4 おわりに

以上、『百人一首図絵』と北斎の「百人一首うばがえとき」における関連を示す諸例を挙げたが、その他にも、モチーフの類似の見られる例には以下のようなものがある(数字は歌番号)。

- 22 文屋康秀 当世人物、風に悩む
- 25 三條右大臣 忍び来る被衣の女と侍女
- 26 貞信公 貴人を迎える僧
- 55 大納言公任 当世の滝遊覧
- 61 伊勢大輔 桜の献上行列
- 72 祐子内親王家 道を聞く海浜の旅人
- 73 前中納言匡房 当世の峯の花見
- 77 崇徳院 谷川と女の旅人
- 80 待賢門院堀河 湯桶、角盥
- 81 後徳大寺左大臣 蚊帳を出て月を眺める女
- 92 二条院讃岐 当世の潮干狩り

このような諸例からは、北斎が『百人一首図絵』を参照したことは明らかであろう。百人一首の歌意の解釈を北斎が独力で事足りりとしたとは考えにくく、その絵画化に際して何らかの裏付けとなる資料を参照することは当然あって然るべきことである。『百人一首図絵』は、まさに北斎が手にした資料の一つであったものと思われる。

当世化の表現に関しては、『百人一首図絵』が上方風の風俗描写であったのに対し、北斎は江戸風の描写に替えている。本稿で採り上げた『百人一首図絵』からの影響は、歌意の当世化表現、構図の摂取、モチーフの抽出、諸職の生業描写、見立の手法といった点など、いくつかの面に分けて指摘することができよう。

「うばがえとき」という題には平易に説くといった意味も汲み取れるが、「絵とき」という言葉は『図絵』の作者の田山が付言の中で用いている「ときこと(説きこと)」という語に導かれたものかもしれない。あるいは、錦絵揃物「百人一首うばがえとき」という構想自体、多様な絵画化の手法をとった『百人

一首図絵』が大きな契機となって生まれたものではないかとも考えられる。

『百人一首図絵』の絵が制作の基底にあったとしても、北斎がその非凡な造形力によって、新たに独自の芸術を生んでいることはいうまでもない。

〔注釈〕

- 1) 画中の題は「百人一首」に続いて、「乳母か絵説」「姥かゑとき」「宇波かゑとき」「うはか縁説」など、さまざまに書されているが、本稿では便宜、音をとって「うばがえとき」と表記する。
- 2) 版下絵55図、校合摺1図(歌番号30:壬生忠峯)、ジローによる亜鉛版写真製版4図、大正期に製作された佐藤正太郎版の錦絵4図。
- 3) 山口桂三郎「北斎筆「百人一首うばがえとき」について」(『浮世絵芸術』55号、1978年)、永田生慈『北斎美術館5・物語絵』(集英社、1990年、pp. 75-100)、「百人一首うはか繪説」pp. 101-131、「百人一首うはか繪説版下絵」Roger S. Keyes, 'Hokusai's Illustrations for the 100 Poems', Museum Studies no.10, 1983、エバ・マホカ「葛飾北斎の絵画にみる「日本」—江戸時代後期の国風認識の成立をめぐる」(『浮世絵芸術』156号、2008年)、田辺昌子『葛飾北斎 百人一首姥かゑとき』(二玄社、2011年)
- 4) Peter Morse, HOKUSAI, One Hundred Poets (George Brazillier, Inc., New York, 1989)。1996年に『北斎百人一首 うばがえとき』として和訳本(高階絵里訳)が岩波書店から出版されている。
- 5) 題箋は「百人一首図絵」、扉題は「百人一首図絵」。本稿では「百人一首図絵」とした。
- 6) 日本書誌学大系34「絵本年表」青裳堂書店、1983-87
- 7) この材木を切る職人の描写はすでに「富嶽三十六景・遠江山中」に見られる。

〔附記〕

拙著『芳年 月百姿』(東京堂出版、2010)において、42「やすらはて寝なましものを小夜ふけて かたふく迄の月を見しかな」(赤染衛門)の参考資料として『百人一首一夕話』巻五の小式部内侍の図を挙げたが、その後、該図が『百人一首図絵』の歌番号59赤染衛門を典拠としていることが判明したので、ここに訂正をしておきたい。